

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390100206		
法人名	有限会社 ゆうしん		
事業所名	グループホーム錦ヶ丘		
所在地	熊本県熊本市東区錦ヶ丘26番11号		
自己評価作成日	令和5年12月1日	評価結果市町村受理日	令和6年3月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和5年12月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

同一建物内に居宅介護支援事業所、デイサービス、小規模多機能型居宅介護、特定施設入居者介護、福祉用具と当グループホームの6事業所あり、日頃から連携をとって顔馴染みの関係を作っている。医療面では訪問看護と24時間の連携しており、安心した生活を送っていただけるような体制を整えている。希望者は24時間対応在宅診療を受けながら体調不良時となるべく環境を変えずに馴染みの場所ですごせるよう支援している。家庭的な空間で過ごし、五感で生活を感じながら穏やかに心地よい暮らしが送れるよう寄り添い支えている。勤続年数10年前後の職員が多く、チームワークが良い。常勤職員6名全員が介護福祉士を取得し、職員間で気付きや知識・技術を共有しチームケアの質の向上に意欲的に取り組んでいる。利用者、職員が共に生き活きと過ごし、各々の強みを発揮できる環境作りを心掛けている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは春の桜並木や櫻の緑が美しい好立地にあり、6事業所を展開する法人の建物の一角にある。この夏には新たにパンの小売店が開店しており、住民との交流が地域の活性化に繋がるものと期待されている。異動により管理者となった職員は当ホームでの職務経験があり、再びホームに戻ってきたことに感謝しつつ、コロナ禍で制限された家族や地域との交流再開、入居者支援の充実に邁進したいとしている。運営推進会議の直接開催に伴い、地域からもたらされる意見や情報をホームへの追い風とし運営に反映させており、今後の展開が期待されることである。法人の研修体制が充実しており、コロナ禍でリモートによる開催となったことで、誰もが、どこからでも参加できるように身体拘束や虐待への発生のメカニズムの理解や対処法などをより深く学ぶ機会としている。入居者のできることを役割の一つとし、日々の生活に発揮できる喜びを支援しながら、温かみのある運営が展開されることが期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の掲示を行い、朝礼時に唱和することで理念を共有し、実践に繋げることができるよう取り組んでいる。	職員の定着率が高く、入居者にとって馴染みの顔ぶれ、慣れ親しんだ場所での生活が安心するところとなっている。6月の異動により新たに管理者となった職員にとっても、以前ケアマネジャーとして入居者と生活を共にした所であり、変わらぬ理念を引き続きケアの指針として育んでいくこととしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議で地域行事の情報収集を行い、尾ノ上校区の行事に法人全体で参加していきたい。同一建物内に9月にパン屋がオープンし、地域の方が立ち寄りやすい場所となり交流が促進されることを期待している。	法人6事業所が入る建物1階に小売り店(パン屋)が出店し、地域から人々が訪れ活性化に繋がればとの期待が寄せられている。入居者の役割に下校中の中学生の見守りがあり、ひ孫のような子供たちの存在は入居者の喜びとなって地域交流が出来ている。法人事業所が一体となって建物周辺や前面道路の清掃活動を実施している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護サポーターやボランティア、学生の職場体験の受け入れ等を再開していきたいと考えている。近隣の散歩等で積極的に挨拶を交わし、交流のきっかけとしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染防止にて運営推進会議は開催できず文書での報告を継続していたが、2023年7月より対面での運営推進会議を再開した。顔が見える関係性作りを深め、忌憚のない意見をいただける場となるよう努めている。	7月の直接開催移行推進委員にホーム内を見てもらい、顔を合わせて話す事の重要性を参加者も実感している。活動や研修、事故について報告し、それらに対する意見をもらいながら委員からの提案や地域情報がホーム運営に活かされている。	委員から1階に出店した店舗周辺に地域の人々が腰掛ける椅子を設置したらどうかといった意見があがっている。法人として検討されることが期待される。また今後法人が運営するグループホームの推進会議に互いに参加することで、地域の情報交換やケアの質の向上が入居者支援に反映されるものと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センターへ事業所の活動報告を行うと共に、校区の情報や研修案内や他事業所の取り組み状況などの情報をいただき、助言等を受けている。行政からの連絡事項は主にメールを通じて把握し、感染対策等に繋げている。	運営推進会議には地域包括や校区の社協長が参加している。行政への事故報告や介護保険の更新代行を行い、認定調査時には動作確認や入居者の状況説明に管理者や家族が同席している。管理者は長引くコロナ禍でこれまで職員以外にホームに風を入れるものがいなかったとし、運営推進会議が対面開催となったことでこれからのホーム運営に反映したいとしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人全体で毎月「身体拘束適正化委員会」を開き、身体拘束等の兆候が少しでもある事象は慎重に検討し、対策を講じる話し合いを行っている。	法人に身体拘束適正化委員会を設置し、毎月各事業所からあがった問題提起と解決策に向けた話し合いを実施し、虐待防止についても同様に会議が機能するよう委員会の充実を図っている。センサーマットの使用について主治医からは「リスクが無いわけではなく、いつでも気を引き締めておくことが重要である」との意見に職員の気づきやセンサーマットに頼り切らない事などを申し合わせている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年2回身体拘束及び虐待をテーマとした内部研修を行い、虐待についての知識の取得に努め、日々のケアの中で虐待にあたる物がないか確認しながらケアにあたっている。スピーチロックも虐待に繋がるという意識を持ち、特に気を付けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利侵害を受けやすい状態の方へサービスを提供していることを自覚し、人としての尊厳を侵害することがないようにサービスの質の向上に努めている。成年後見制度や日常生活自立支援事業について学び、必要時に利用できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	書面での説明と施設内を案内しながら丁寧な説明を行い、入居後の生活を具体的に想定した内容や見通しについても質問を受け、意向を確認している。しっかり納得し契約していただくことを特に気を付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者、家族より要望や苦情、意見を遠慮せず言っていただけるような関係作りに努めている。玄関に意見箱を設置している。頂いた意見は真摯に受け止め、運営に活かせるように取り組み、取り組み内容をお伝えしている。	職員は入居者との信頼関係を大切にしており、まずはホームが安心できる場所である事が重要であるとしている。日々の会話から入居者の要望を引き出すようにしているが、会話でのコミュニケーションが難しい方もおられ、これまでの生活の様子や家族からの聞き取りから判断するようにしている。家族には面会時などに現状を伝えながら意見をもらうようにしている。	現在、運営推進会議に家族が参加しておらず、今後は働きかけが必要と思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員にとって望ましい職場環境実現に向けて情報共有や話し合いの場がある。職員の代表が参加し委員会でまとめられた内容は社内連絡ツールで発信されている。	職員が自由に意見を言える風通しのよい環境整備に努力している。発言の少ない職員には管理者の方から尋ねたり、有給取得にも成果があがっている。法人の衛生委員会が機能しており、職員にとって望ましい職場環境の実現に「腰痛対策」を議題とした研修なども行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者が定期的に事業所を訪れ、職員と交流を図り、意見を言いやすい環境を作っている。また人事考課にて各職員が向上心、やりがいを持って業務に取り組めるように整備されている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	人事考課にて個別に現状の力量の把握、目標の設定を行っている。社内の研修や資格取得の為の研修に参加できるよう配慮し、職員の育成や質の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修や勉強会、情報交換会にオンライン参加し、情報取得やサービスの質の向上に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	アセスメントにより本人の困り事やどのような支援が必要か自分で出来る事は何か、十分に知ることを重視している。環境の変化による不安や戸惑う気持ちに寄り添い、本人の言葉や思いを傾聴している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が抱えている困り事や不安、生活に対する思いを聞き、出来る支援を検討し提案している。先々に起こることについてはその都度よく相談しながら一緒に考えていきたいと思いますと伝えている。相談しやすい関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族との面談や聞き取りによって、困っていることや不安な事の把握に努め、本人にとって最適なサービスは何かを考え、他サービス利用を含めた幅広い提案ができるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来ることに着目し、自分でしたい、誰かの役に立ちたい気持ちを受け止め尊重している。出来る範囲で一緒に作業を行うことで、協力し合い共に生活をしていく関係作りを行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や電話にて本人の生活状況をお伝えするとともに、家族が参加できる行事等を企画し、本人を共に支えていく関係性を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の知人、友人等の面会を受け入れ、一緒にゆっくりと過ごしていただけるよう配慮している。また、他部署へ出向き友人や顔見知りの職員との交流が継続できるよう支援している。	家族等の面会が直接できるようになり、訪問当日も衣類の整理を入居者と一緒に行われる家族の様子が確認されている。以前利用していた法人施設の職員との関係性が薄れないような関わりやこれまで続けてきた家事の継続など出来る事で自信を持ってもらうようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が交流できるようレクリエーションを企画したり、職員が会話の橋渡し役や代弁することで交流を促進している。利用者の好みの話題を提供し、共にテーブルを囲んで過ごす時間を作っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用中の関係性をもとに、退所後であっても気軽に相談できるよう声掛け説明をしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の生活に対する意向の聞き取り、汲み取りを行うよう努め、どのような支援が本人の希望するものなのか考え、その人らしさを大切に支援を行っている。	普段の関わりから入居者の思いをくみ取り、支援に反映している。表現困難な場合にはこれまでの生活歴や家族からの聞き取りにより入居者の思いを確認するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者の生活歴を共有し、馴染みの暮らし方や生活環境に近い生活をしていただけるようにしている。家族に馴染みの物を持参していただいたり、聞き取りを行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護記録を基に一日の過ごし方やその日の状態、本人の好みの活動等を申し送りやミーティングで共有し、その方に合った生活スタイルで過ごせるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に職員でカンファレンスを行い、本人、家族より情報や意見を聞き、サービス内容を検討している。それぞれの気付きや意見を反映し、カンファレンスで決定した事をチームケアとして実践している。	ケアマネジャーはプラン作成にあたり、前施設などの情報から今の入居者に必要なものを見極め、本人・家族の意向やホームでの様子から総合的に判断している。モニタリングには全職員が関わり、それぞれの視点から様々な意見が出る事でプランに反映している。入居者の現役時代の仕事に対する誇りや出来ることを尊重しながら自分のペースで取り組んでもらうとしたプランには、運営推進会議への同席など随所に入居者の出番が用意され、ホームの中で役割を持つ事で自信や生きがいに繋がっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアを行った事を記録し、職員間で共有することで介護計画の見直しに反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々で変化する本人や家族の状況やニーズに対応できるよう柔軟な支援でその人らしい生活を支えている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ渦で地域との関わりが希薄になった現状はあるが、徐々に以前のような地域との関わりが持てるように努めていきたい。地域行事への参加や散歩や買い物で地域住民との馴染みの関係を築くところから始めたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は本人や家族の希望を優先し、家族と協力し受診支援を行っている。希望がない場合は心身の状況に応じた病院を紹介している。診察時には状態報告を行い、医療面の助言を受け連携をとっている。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援しており、現在4か所の医療機関により訪問診療(月1~2回)が行われている。診療結果は家族の要望に応じて(毎回や変化時など)伝えている。専門医への受診は家族は難しく主にホームで対応しているが、現地で待ち合わせるケースもある。歯科は必要時とそれぞれの希望する歯科医によるメンテナンスが行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護事業所と医療連携をとっている。週1回の訪問にて健康チェックを受け、健康面の相談をしている。日頃の健康状態を把握した看護師に24時間対応で連絡相談ができる体制を整えている。同一建物内の看護師とも連携している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際は速やかに情報提供をおこない病状把握に努めている。退院後の受け入れについて丁寧に本人、家族、病院に説明し、退院後の生活が安心して送れるよう情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に事前意思確認書の取り交わしを行い、重度化した際は本人、家族、主治医との話し合いの場を設け、今後の病状理解、事業所での看取りの説明を行い、共通理解や方針の共有を行っている。訪問診療医と訪問看護と連携し支援している。	入居時に環境が整えば最終まで支援できることを伝え、事前意思確認書を取り交わしている。重度化した場合医師を含め話し合いの場を設け、方向性や方針の共有を図っている。看取り支援の際は、訪問診療医、訪問看護師と連携を図りながら可能な限り意向に沿う最終の支援に努めている。あらたまった看取り研修は行なわれていないが、事例検討などから学んでいる。	これまで家族の意向やその方が大切にしてきた気丈な生き方などを見守りながら最終の支援が行われている。家族からも感謝の言葉が寄せられており、今後も日常の関わりを大切に支援が継続されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応について社内研修を定期的に行っている。心臓マッサージの方法やAEDの使用方法、通報についてロールプレイ方式で実技を行っている。緊急時のマニュアルを作成し、職員がいつでも確認できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防の指導による点検を年2回実施。防災についての社内研修を実施している。マニュアルは職員が再確認できるようにしており、防火の為に安全点検は自主点検票で毎日行っている。年2回、非常食体験をし、備蓄品の点検を行っている。	年2回火災を中心にした訓練や業者による防災チェック、職員による日々の安全チェックを実施している。5月には防災、防犯に関する研修会も行われており、マニュアルの確認や非常時の自身の行動をイメージしながら受講している。備蓄はリストをもとに入居者・職員の3日分と、感染症に関するものは法人1階で確保している。4月と9月には非常食体験も行われており、運営推進会議でアルファームの味のバリエーションについても紹介されている。	BCPの策定については勉強会に参加し、取り掛かりの途中である。完成後は職員間での共有が期待される。今後は運営推進会議を活用した訓練や安全対策への取組を家族へ伝え、意見や提案を受ける機会を持つ事も良いと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	社内研修にて虐待防止、プライバシー保護、接遇について学び、利用者の尊厳と誇りを損ねないよう敬語・丁寧語を基本とした言葉掛けができるよう職員へ周知・指導を行っている。	法人研修の中で入居者の尊厳やプライバシー保護、接遇などに関して学んでいる。呼称は苗字や家族の要望で下の名前や旧姓の方が安心される方など個々に応じて対応している。身だしなみやおしゃれの支援として家族の協力を得ながら、季節の衣類や好みの衣服の持ち込みなども行われている。髪のカットは訪問理容や外泊時にカットされて帰園される方もおられる。正月前は特に散髪の要望が多いようである。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常的にコミュニケーションをとることで本人の思いを表出する行動などを把握し、生活に対する希望に添うように努めている。又、自己決定の促しを行うことで少しでも自己決定の機会ができるよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日を一緒に過ごすうえで決して無理強いすることなく、一人一人の生活のペースを大切にし、何か行う時も一つ一つ声を掛けて利用者の意向を聞いて希望に添う支援を行うようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に合った衣類が着れるように支援している。また、離床後は必ず髪にくしを通してフロアへ誘導、男性は髭剃りを毎日行う等、身だしなみに気を配り支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	普通の会話の中で食事の嗜好などを聞き取り、おいしく食べていただけるよう工夫している。又、本日の献立を配膳しながら伝える事で楽しみに繋げるよう配慮している。	献立や食材の準備は法人栄養士や厨房で行っており、ホーム職員が調理し提供している。食事形態は個々の嚥下力に応じて準備しているが、ミキサー食が多くなっている。おやつは家族が好みのものを用意される事もある。入居者はテーブル拭きやつぎ分けなど出来ることで食への関わりを持ってもらっている。職員は持参した弁当などを摂っている。	入居者の代弁者として、今後は味や量の確認を兼ねて職員1名でも同じものを摂る事ができないか検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士が考えた献立にそって提供することで栄養のバランスに配慮している。食事形態は適宜、本人の状態にあった物をカンファレンスで検討し安全な食事提供に努めている。また水分摂取に消極的な利用者には水分ゼリー等の飲みやすい物を提供している。摂取量の確認も行い、特変時の原因究明に役立てている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後に口腔ケアの声掛けを行い、スポンジ等を使用し口腔内の清潔に努めている。又、必要時には家族と相談し訪問歯科を利用している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	尿意がない方は排泄パターンを把握し定期的に誘導を行い、トイレへ座っていただくことで排泄を促している。また直接的な訴えでない時も表情や動き等で声掛けし誘導を行なっている。安易に紙パンツ使用に切り替ええないよう可能な限り対応策を検討している。	気持ちよく排泄できることが重要であるとし、自立の方の継続や把握した排泄パターンから必要に応じて定期的に誘導を行っている。リハビリパンツのみや尿取りを併用される方が殆どであるが、布パンツで過ごされる方やテープ式オムツを使用される方など個々に応じて支援している。ホームには立位式便器が備わり、男性入居者が使用されており、使用後は本人の尊厳に配慮しながら、小まめに確認し、いつでも気持ちよく使用できるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックを行い記録し、排便が困難な方へは水分を多めに摂っていただいたり、牛乳を朝食に付けたりと工夫している。下剤を使用する場合は一人一人に合った使用量やタイミングを検討している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	出来る限り本人の希望やタイミングに添い入浴していただいている。入浴拒否がある方には声掛けに工夫し気持ち良く入浴していただけるよう職員間で情報共有している。必要時には2名介助を行い安全面に配慮している。	週2回の入浴を、拒否がある方にはタイミングを見ながら誘導、支援に努めている。安全面から必ずマンツーマンで対応する事としており、現在は2名介助を必要とする方も多くなっている。チェアー浴の方には足浴をしながら、血行を促すように配慮している。季節湯(菖蒲・柚子)も継続しており、全員が楽しめるよう3日間実施している。	今後も個々に応じた入浴の楽しみを職員間で検討し、支援されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の生活習慣や日々の様子を把握し、午睡の時間を設けたりソファにてゆっくり過ごすことが出来るような環境を整えている。夜間も安心していただけるような声掛け、巡視を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局の居宅療養管理指導を受け、処方された薬について指導助言を受けている。一方化された薬を専用のボックスで管理し、飲み間違いがないよう職員がダブルチェックで確認して服用していただいている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事や趣味活動など利用者が楽しみと思えることを利用者と職員が共有して一緒に楽しみ気分転換が図れるよう支援している。又、家族からの差し入れの嗜好品は適時声掛けして提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候の良い日は希望をとり散歩へ出掛けしている。ミニドライブで車窓からの景色を眺め、季節を感じていただけるようにしている。	10月、11月は程よい気温でテラスや野外での活動を増やしている。要望を出される方は殆どおられないが、ADLに応じて誘いの声掛けし散歩や、全介助の方も車いすを使用し出かけている。近隣中学校周辺や自衛隊通りの散歩が人気のコースとなっている。車を使った外出としては、第二空港線ドライブや県庁のイチョウ見学を2班に分けて出かけている。コロナ5類移行後は家族の協力により外泊も実現している。	管理者は普段から楽しむ様子を家族へ伝えていくことが大切としている。また家族へも参加可能な外出については声掛けをしており、継続した取組が期待される。1階でのラジオ体操の参加者には、スタンプカードなどを作る事で更に楽しみなものになると思われる。職員の工夫に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人、家族の希望に応じ所持していただいている。近隣の店や外出時に使えるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や知人からの贈り物の際はお礼の電話を掛け、交流関係が円滑に継続できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	中央のリビングは広い窓があり陽当たりが良く天候を感じられる明るい雰囲気である。昼間はなるべくリビングで過ごすようにしており、職員は利用者の言葉に耳を傾け安心して心地良く過ごせるよう配慮している。	建物の2階にあるホームは家庭的で安心できる空間を心掛けている。室温や照明などは入居者の状態に合わせて調整しており、リビング内のカーテンは閉めて過ごす習慣の方もおられ、意向を尊重している。職員の特技を活かした飾りつけや入居者の作品の掲示などからも季節を感じる事が出来る。入居者にとって居心地の良い環境は、物的なことに加え、職員の姿が重要であることを共有し支援にあたっている。	コロナ感染症への対応から消毒が徹底され、特に木製のテーブルにおいては変色や傷みが進んでいる。クロスでは安全面に不安があり、検討したいとしている。取り組みに期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者は思い思いの席やソファで思い思いに過ごされている。テレビの視聴や好きな場所で利用者同士の会話ができるよう空間にゆとりがある。共用空間にはソファを多く置き、くつろげる空間作りを行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた品物や家族の写真等を依頼し、その人らしさが感じられる落ち着いた部屋となるよう家族と協力して支援している。毎日、掃除を行い整理整頓に努めている	居室入口には職員のアイデアにより季節の飾り物が掛けられ、目印にもなっており、来訪の家族も喜ばれている。居室への持ち込みについては馴染みものやテレビ、仏壇など例をあげながら説明しており、入居前に少ずつ持ち込まれている。管理者は家族からの情報が大切であり、テレビについては番組の好みも聞いており、情報をメモで職員へ伝える家族もおられるようである。居室の掃除や衣替えは現在、職員が中心に行っているが、コロナ5類移行後は家族による片付けや衣類の確認も行われており、訪問当日も居室環境と一緒に取り組む姿が見られた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来る能力を把握し、居室やトイレの表示を大きくしたり、目印になる作品を貼る等の工夫をしている。		